

職を『選ぶ』自由

—インド・ラージャスターン州における清掃人のための職業訓練事業をたずねて—

増木優衣*

インドは西部、ラージャスターン、
ジリジリと身を焦がす陽射しが容赦なく照
りつける、砂漠の国。

そんな乾燥地帯に位置する2つの街アル
ワールとトンクに、ナイ・ディシャーとい
う職業訓練施設がある。ナイ・ディシャー
とは、ヒンディー語で「新しい道」を意味
し、歴史的に社会の底辺に位置づけられてき
た人々が、新たな職業を選び、新しい生活を
送ることのできるようにとの願いを込めて名
付けられた。なかに入ると、鮮やかなスカイ
ブルーのサリーを身に纏った女性たちが、縫
製に刺繍に料理に美容にと、各々の作業に勤
しんでいる光景に出くわす。とても楽しそう
で、思わずサリーを着せてもらったり、手に
マンディーと呼ばれるタトゥーのようなもの
を描いてもらったりしていた。すると、この
真夏の暑さもここを訪れた当初の目的も忘れ
かけて時間だけ経ってしまうのだから、なん
とも不思議だ。

わたしの調査地インドには、伝統的に人間
の排泄物を集めて処理する仕事に従事して
きた、清掃人と呼ばれる人々が存在してい
る。彼らはカースト制度のなかでも不可触民

(Untouchable) と呼ばれる最下層に位置づけ
られ、同じヒन्दゥー教徒であっても、寺の
なかに入り祈ることが許されてこなかった。
上位カーストの人々とともに食事をするこ
とも、同じ池で沐浴をすることも、彼らに触れ
ることについても、同様に厳しい規則が存在
していた。それはひとえに、彼らのもつ不浄
性 (Untouchability) に由来しているとされ
る。清掃人の場合は、人糞を集めているため
に、その手に不浄性が宿っているとされ、不
可触民として扱われてきた。

2013年9月にわたしが訪れたのは、トイ
レ問題および衛生問題に対処することで清
掃人の解放をめざしている NGO が運営し
ている、清掃人のための職業訓練施設であ
る。この NGO はスラブ・インターナショナル
(Sulabh International, 以下スラブ) とい
い、1970年にバラモン階級出身のビンデシュ
ワル・パタック博士により創設された。スラ
ブは政府からの受注で、インド全域の病院や
観光地、その他の公共施設に簡易公衆トイレ
(Sulabh Toilet Complex と呼ばれる、写真1)
を設置し、1回の使用につき2ルピー (約3
円) を利用者から徴収することで、トイレの
メンテナンス費用を賄っている。スラブが展

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

開する事業コンセプトは、極めてシンプルである。それは、インドの人々、特に農村部の人々は、水洗トイレ（water closet：WC）がないために草むらや家の一角で用を足しており、その排泄物を清掃人が集めていた。しかし、水洗トイレを作って普及させてしまえば、清掃人の手を借りなくても一連の排泄過程を自分で管理することができる。また、パタック博士は、排泄物を貯めておく2つの大きな穴を備えたトイレ（写真2）を開発し、公共施設および特定の農村世帯に設置することでインドの深刻な公衆衛生問題に対処し、かつ清掃人をその仕事から解放することを実現させた。さらに、スラブはインドの4カ所に職業訓練施設を設置し、そこでは清掃人であった人々が新たな職業に従事し、収入の向

上を図っている。

職業訓練施設では、サリーやほかの女性向け衣服の縫製や刺繍（写真3）、フェイシャル・マッサージやネイルサロン、チョウミン（炒麺）やパパドゥ（せんべい的一种）作り（写真4）などが行なわれ、そこで作られた商品は、ナイ・ディシャーや近くのマーケットで売られる。特にサリーや、チュニックとレギンスを組み合わせたようなバンジャービードレスと呼ばれる女性の衣服は、細かなデザインの刺繍が施されているために高いものだとして一着4,000ルピー（約6,800円）ほどで売られる場合もある。

アルワールとトンクには、現在それぞれ100人強の元清掃人の女性が訓練を受け商品を生産し販売しているが、この女性たちは清



写真1 アルワールにあるスラブの公衆トイレ



写真3 刺繍を習う女性たち



写真2 2つの穴を備えたトイレの一種



写真4 パパドゥを作る女性たち

掃人としてどのような経験をしてきたのだろうか。アルワールのナイ・ディシャーで、ひとりの女性のライフストーリーを耳にする機会を得た。

彼女、ラクシュミー（仮名）は、現在32歳で3人の子どもの母親である。結婚したのは彼女が16歳のときで、結婚後に清掃人（ラージャスターン州では清掃人はバーンギー（Bhangi）と呼ばれてきた）の仕事に従事しはじめた。初等教育も受けていない彼女は、不可触民以外のカースト（General caste と呼ばれる）15世帯の排泄物の処理を請け負っていた。朝6時に起きてそれぞれの世帯に赴き、午前11時頃にすべての排泄物とともに帰宅するという生活を送った。排泄物を集めるときは、皿のような形をした入れ物に、竹箒で排泄物を入れ、それを頭の上に乗せて家から家へと移動する。「排泄物って強烈な臭いですが、どうしていたのですか」という素朴な疑問に、彼女はストールで鼻を覆う仕草をして、「いつもこうしていたのよ」と苦笑混じりにそっと微笑んだ。帰宅したのちは、主婦として家事をする以外には寝ていたりするのみで、なにもすることがなかったという。また、ヒन्दゥー教徒が朝の礼拝に行く時間に、自分は清掃人の仕事をしなければならなかったため、祈ることもできなかった、と語った。

2003年にアルワールにナイ・ディシャーができて以降、スラブはアルワールのほとんどの世帯に例の2つの穴の簡易トイレ（Twin-pit toilet と呼ばれる）を設置した。その後、彼女はナイ・ディシャーで職業訓練を

受け、現在はテイラー（縫製）の仕事を自宅でも請け負っている。夫も、ナイ・ディシャーができる以前は、トイレ掃除や床掃除などの仕事に従事していたが、ラクシュミーが職業訓練を受け、収入向上などを達成していくなかで、自らも写真家へと転身した。

また、スラブは、政治家や著名人を呼んで、元清掃人の手によって作られた食べ物を買ってもらうなど、不可触民差別を撤廃するためのパフォーマンスを行なった。その成果もあり、現在では、より伝統を堅持する傾向にある高齢の一般カーストの人々が自らの家に元清掃人を呼んでフェイスナル・マッサージなどを頼んだり、チャイやビスケットを共食するなど、不浄とされていた彼女たちの手が、直接一般カーストの人々に触れることが可能となりつつある。以前であれば、排泄物処理の賃金は投げて渡され、水もコップではなく小さな瓶から彼女たちの手に注がれるだけであった事実からすれば、これはとてつもなく大きな社会変革であると、ナイ・ディシャーの職員は熱心に語った。

このように、スラブの活動によって、清掃人にとっての仕事や家庭や社会など、さまざまな側面からの変化を垣間見ることができたが、わたしが一番知りたかったのは、「彼女にとっての」一番の変化とは何だったのかということだったので、最後に聞いてみた。

「いまは、朝になると、子どもは学校に行って、夫は働きに出かけて、わたしもナイ・ディシャーに仕事に行くの。そんなわたしを見て、人々はわたしを尊重（respect）してくれる。それからね、（スラブの活動が表

彰される際に) ニューヨークの国連にも行ったの。アメリカよ、アメリカ。あとは、夫が協力的に家事を手伝ってくれるようになったこと。国連に行く際も、任せてと送り出してくれたの。」

開発の現場でよく使われる「エンパワーメント」という単語は、辞書上は力をつけさせることという他動詞的な意味をもっている。そのため、この言葉は人から与えられるものであり、自律的ではないという見解もある。しかし、力をつけることとなるきっかけは他者からの働きかけであるにしろ、自律的なものであるにしろ、どちらにしても力をつけた当該者がそれに対して積極的な意味を感じているのであれば、それが他律的か自律的かはそこまで問題ではないように思われる。焦点を当てなければならないのは、いま当事者がどう感じているのかに関してであり、その意味で当事者の言葉は、事実かそうでないかにかかわらず、彼らにとっての真実を示している点で極めて重要である。

彼女の言葉が示すように、ラクシュミーにとってのエンパワーメントとは、それが彼女自身によるものなのか、ナイ・ディシャーの働きかけによるものなのかは別にして、以前に比べ、コミュニティの人々から尊重されることによって、自分自身の内面に自信を獲得したことそのものなのである。

このように自信を獲得した人々が、社会とどう関り、それによってカースト関係や不浄性、さらにトイレというものに対する人々の

認識というものは実際どのように変化しているのかなど、明らかにしなければならないことは、まだまだ多くある。そのためには長期のフィールド調査が重要で、もっと多くの元清掃人と、一般カーストの人々の話に耳を傾ける必要があるだろう。特に社会的弱者とされてきた人々の経験を聞き、なにが(NGOやほかの人々も重要だが、なによりも)「彼らにとっての」真実なのかということに少しでも肉薄できる力が求められていくことをひしと感じた。

気がつく、わたしはラクシュミーの手を握りながら話を聞いていた。10年前までは排泄物を処理していたこの同じ手で、いまはサリーを作ったり食べ物を作って売ったり、わたしにマニキュアを塗ってくれたり、さまざまな選択肢を自由につかむための努力をすることが可能となった。職員の話によれば、アルワールとトンクでは全清掃人の解放が実現したが、まだラージャスターンのある一部の地域、そしてインド全域でも一部の地域では現在でも清掃人の仕事に従事している人々がいるのだそうである。

帰国したら清掃人に対する知識を深める必要があることをひどく感じながら、ラクシュミーにお礼を言って外に出ると、相変わらず暑い陽射しが直射で照りつけて、くらくら立ちくらみさえする。振り向くと人々が手を振ってくれて、暑さに負けずにわたしも手を振り返して、砂漠の国のナイ・ディシャーをあとにした。